

内装ディスプレイ 市場回復 業界トップに闘く②

「コロナ禍でも受注する。ホテルなどの観光が安定していた分野も関連施設、空港の店舗がありました。」

「ミュージアム領域はそれほどコロナ禍の影響を受けなかった。文化空間事業は中長期で計画されるものが多いので、それを淡々と推進してきた感じだ」とは。

「一方で、特に影響を受けた分野は。」

「イベント分野は影響を受けたが、今はコロナ禍前とほぼ同じ水準まで戻ってきている。」

「現在、24年2月からの新中期経営計画を策定しているが、どのタイミングでコロナ禍前の状況に戻せるかというところがポイント

丹青社社長

小林 統氏



「25年には大阪・関西万博があります。万博は本来、我々が一番得意とする分野。既にパビリオンの手伝いをしてい

「計画数値上でも売り上げに占める万博の割合は大きい。24年度、25年度にかけて大きく右肩上がりする可能性もある。しかし、万博に集中し過ぎると通常の事業がおざなりになってしまふ。そこはバランスを見ていく」

「万博後の市場をどう見ますか。」

「日本は人口減少が続くが、30年くらいまではそれほど縮小しないと考えている。ただ

空間の研究 欠かさず

だ。今は事業基盤をしろもある。ただ工期のつかり立て直している。遅れやコスト増の問題最中で、その進捗をがクロスアップされ確認している」

「計画数値上でも売り上げに占める万博の割合は大きい。24年度、25年度にかけて大きく右肩上がりする可能性もある。しかし、万博に集中し過ぎると通常の事業がおざなりになってしまふ。そこはバランスを見ていく」

リアル充実に「仮想」駆使

空間の形やあり方は変方をバーチャル空間でわっていくだろう。研 検証しながら、今後は究や他業界と連携しながら、リアルに検証結果から、対応しないといを役立てていくことがけない」

「最先端の技術を使う。当社はバーチャル空間作りで果敢にに寄るのではなく、逆取り組んでいます。に機能として使う研究「リアル空間のありをししている」

協業の成果刈り取り期待

記者の目

内装ディスプレイ業界2位の丹青社は、1970年の大阪万博をはじめ過去の万博で事業成長してきた。そのため、今度の万博にける期待は大きい。社員研修の充実や新技術を用いた空間作り、他社との協業など種はまいてきた。それらをどのように育て、うまく刈り取れるか小林統社長の手腕が問われている。

(村上授)